三田葆光『櫨紅葉』攷―刊本と稿本―

武井和人

一、はじめに

三田葆光（さんだかねみつ）といっても、こんにち、知る人は少なからうと思ふ。そこでまづ、『国書人名辞典』の当該項を抄記しておくこととする。

幕臣・歌人。〔生没〕文政八年（一八二五）六月二十一日生、明治四十年（一九〇七）十月十七日没。八十三歳。〔名号〕名、初め礼本、のち喜六・葆光。通称、伊右衛門・伊兵衛。号、櫨園。〔経歴〕箱館奉行支配組頭として蝦夷開拓に従事。文久元年（一八六一）向山黄村に随行し欧米を巡る。維新後は一時女学校に奉職したが辞職。小林歌城・黒川真頼に師事し、和歌・茶道に余生を送り、『和学入門』『櫨紅葉』を遺した。

〔著作〕おほぬさ辨妄

この他注意すべき著作として、『白石先生年譜』（一八八一）『玉乃緒變格辨』（一八八三）などがある。以上の著作の内、『和学入門』『玉乃緒變格辨』『白石先生年譜』は、国立国会図書館近代デジタルライブラリーに全文の画像が掲載されてゐる。なほ、葆光のより詳しい事蹟は、『国学者伝記集成』を参看されたい。

さて近時、小論の筆者は、はからざる機縁によつて、葆光の家集『櫨紅葉』の刊本と、稿本（ただし、葆光自身の筆になるものではなく、息・佶（ただし）（一八五三～一九二三）の筆になるものかと思はれる。後述）とを入手することが出来た。あらあらこの両者をつきあはせて比較するに、典籍としての家集それ自体の問題としても頗る興味深いものを持つことはいふまでもないが、より以上に、家集なるもの一般の成立を考へる際、甚だ示唆的なことがらを内包してゐると思へて来たのである。そこで、まづは、両者の関係を具体的に考察し、最後に、家集成立の一般論に話を及ぼしてみたいと考へる。

二、刊本『櫨紅葉』

架蔵本の書誌は以下の如し。

帙入（原帙欠）。袋綴装7冊。22・8×16㎝。表紙は、黄土色地に草花繋白雲母刷文様。題簽（15・2×2・8㎝、単郭）が各冊左に貼られ、「櫨紅葉　一（二～七）」と刻される。墨付は以下の通り。

第1冊　〔序〕5丁〔本文（春）〕46丁
第2冊　〔本文（夏）〕22丁〔（秋）〕28丁

第3冊　〔本文（冬）〕22丁〔（恋）〕7丁
第4冊　〔本文（雑）〕38丁
第5冊　〔本文（雑）〕30丁〔跋〕3丁
第6冊　〔本文（文稿）〕45丁
第7冊　〔本文（文稿？）〕39丁〔刊記〕1丁

第7冊末尾に以下の刊記あり。

明治四十五年六月一日印刷
（非賣品）
明治四十五年六月四日發行
編輯兼　三田　佶
發行者　東京市小石川區江戸川町十九番地
木版印　木村德太郎
刷者　東京市神田區旅籠町一丁目七番地
石版印　磯村登飛知
刷者　東京市麹町區内幸町一丁目五番

本書第一冊巻頭に、「明治四十二年十月田邉太一」及び「明治四十四年十月　男　三田佶謹識」の識語を持つ序二点がある。

田邉序の全文引用はひかへるが、本書成立にかかはる一点のみを引いておくと、冒頭「三田櫨園翁歿後一年令嗣佶持其遺稿来請予序」とあるのは注意される。葆光が没したのは明治四十年（一九〇七）十月十七日、その一年後には既に、「遺稿」といふ形で家集（といふ形にまで整へられてゐたかどうかは分からぬにせよ）が成立してゐたことが分かる。ただし厳密にいへば、この「遺稿」即現稿本『櫨紅葉』と断ずることは出来ない。「遺稿」から稿本へ至る過程で、新たに中書（例へば、佶による部類化）がなされてゐる可能性があるからだ。

佶序は、本書成立を考へる上で極めて重要な証言を含む。以下その全文を引用しておく。

本書は先人の小祥に刊行すへかりしを遷延して今日に至りしは種ゝの事情ありしに由れり
先人は歌道に於ては殊に村田春海大人を景慕しまた最其歌集を愛せしかは本書の體裁は一に彼の琴後集に倣へり
先人常に余に請て曰く琴後集の序に葛西因是の漢文のみを掲けたるは洵に善し況や其名文なるをや抑筆に依て成れるものは漢文を第一とし漢詩を第二とし』4オ
和歌はこれに次くへし固より各其特長ありと雖も大體に於て然りと又曰く詩文の大家にして善く予を知れるものは黄村鋤雲蓮舟の三翁なれとも今や黄鋤二翁は既に逝き獨り蓮舟翁の存するあるのみと是田邉先生に序文を煩はしゝ所以なり
余不肖にして和歌を解せす適友人黒川真道君は故黒川真頼博士の令嗣にして善く箕裘を継かるゝを以て校正刊行等

一切請托せしに精勵従事せられて茲に成』4ウ
刊を見るを得たり因て君の厚誼及ひ佐藤
仁之助君の浄寫の勞を感謝す
本書第七巻及ひ第八巻の文章は先人
稿本のまゝを石版に附せり是聊筆蹟
を存せむか為めにして添削なとの讀み
難きところあらむも敢て一字を改めす原
本に従へり
明治四十四年十月　男　三田　佶謹識（三行分空白）』5オ

さらに重要だと思はれるのが、第五冊末に置かれてゐる黒川真道（一八六六～一九二五、葆光師黒川真頼の男）による跋文である。やや長文にわたるが、以下全文を引用しておく。

ひと日三田佶ぬしのわか家に訪らひきていは
るゝやうこれの櫨紅葉はわかなきちゝのよミ
おける歌の集なりいかてこれを摺巻にものし
て亡夫の記念とも見むまた親しく交はりたりし
人ゝにもおくりてなき人の功徳ともせはやとなむ
おもふされとこはよみいつるまに／＼かき集めたる
ものなれハすこししとけなけなるふし／＼も見ゆめ
るかいとくちをしけれハねかはくはよく考へたゝ
されむこはをまた亡夫は常に村田春海大人に
私淑してかの琴後集のすかたを慕ひゐたり
しかはすへてかの集のさまにならひてむいかてこの』跋1オ
あらましとけなむやうにうまくはからひ給ひてよと
いふおのれうちきゝていみしうよろこひつゝおもひけ
らくこはよにめてたき心もちゐにこそありけれいて
や今の世にある人を見るにその家とミ栄えて時
めけるもすくなからねとよく礼を好めるものあるを
きかすましてその親に孝ある人はよにいくはくか
あらむさるをわか三田ぬしハ家もとミ栄えて
世にあらはれ給へれとつゆ驕れる風のあらさ
るのミか孝養の志の深きことはまた世の人の
かゝミとこそあふかるれさるを今はたかゝるいミ
しき功徳の事をさへおもひたゝれたるはけに』1ウ
こよなうめてたき極みになむさても故葆光翁
ハわか亡夫とはいと交はりあつくして歌文はさら
にもいはす語学音韻の学ひを深く究めさる方
の書ともさへ著はされたれは亡夫もまたなき友
と睦ひたりしまゝに故翁はおのれをも幼きほ
とよりうみの子のことく教へいつくしミ給ひし
かはおのれもまた故翁をは亜父とあふきてあ
かめ敬ひてなむありしかゝれはわか父の集を
ものせむ心ちして一しほうれしくおほゆるまゝ
にこゝろよくうけかひてつはらかによミ考へ
つゝやかて六巻をそえらみはてぬるさてこの』2オ
版下は誰かよけむと三田ぬしにはかりけれハ今
の世に名高き手かき達もあまたきこえためれと
いつれかよく亡夫の心にかなふらむともしらすお

なしくは故真頼大人か教へ子の中にてものせは
なき人の心にもまたよしとやおもはましさらハ佐藤
仁之助ぬしこそしかるへけれとてそのよしを語り
けるに固くいなひけれはぬしこそは故翁とのよし
みも浅からねはかきてえさせよかしと切にすゝめ
たれは筆とりつゝいそしミしほとに一年はかり
にして皆からかきはてぬかくて彫刻師木村徳
太郎におほせてすみやかにその功を終へぬるもい』2ウ
とうれしおもへはけにこの集に三田ぬしかまめなる心
におもひたゝれてよりやう〳〵三とせの永き春秋を
経てなりぬるは世にありかたきわさなれは故翁
の御こゝろにもまたいかはかりかうれしとおほす
らむかしあはれ今の　大御代には例の活版石版なと
いふ印刷の術あるは外国風の製本の法さへ備はり
にたれはさるかたにはらむにはいとたやすくも仕い
てぬへからむをぬしハかゝる今めかしきかたには
つかてひたすらなき父君の遺志にかなへむのこゝ
ろさしにてかくはものしつれハいと〳〵うれしうなむ
亡に事ふること存に事ふるかことき八孝の至りなりと』3オ
古の聖の宣へりしは今わか三田ぬしにおきてま
さにそのまことなるを知れりさはれをちなきお
のれかうけはりてものせる集を故翁の見給はゝあ
なつたなきことも仕出つるよとおもひたまふらむさて
この集を櫨紅葉といふは故翁の櫨園と號せし
によられたりとそ

明治四十四年五月　　黒川真道』3ウ

原稿から刊行に至ること細かな経緯を、この跋はあますところなく書き記してゐて、頗る興味深い証言となつてゐる。

さて、田邉序でいふところの「遺稿」、佶序でいふところの真道が「校正」した原稿、真道跋でいふ「わかなきちゝのよミおける歌の集」、これは一体どのやうなものであり、真道はどのやうに「よく考へたゝ」したのであらうか。もとより、刊本からこれをうかがふすべはない。

三、稿本『櫨紅葉』

『平成22年度古典籍展観大入札会目録』（東京古典会）に、以下の典籍が掲出された。

一八三六　櫨紅葉／三田葆光歌集　黒川真道編并校　黒川真前
旧蔵朱印有　六冊

一見して、刊本『櫨紅葉』の稿本、即ち、真道が「よく考へたゝ」した、まさにそのものではないかと思はれた。その後幸ひにして入手することが出来、あらあらながらも検討した結果、まさしく、真道が最終的にまとめた稿本であることがわかつた。また、真道の「校正」のあとがまざまざと残されてゐて、佶が真道に託した原本がどのやうな編集過程を経て刊本に至つたかを、つぶさにうかがふことが出来る、括目すべき典籍であつたのである。

まづ、架蔵本の書誌を記しておかう。

写本。仮綴6冊。28・1×19・5㎝。外題が打付書で各冊に以下の通りある（〈　〉ハ朱書、それ以外は墨書）。

「〈読了真道／六百四十五首〉／櫨紅葉春　一」

「〈読了真道／三百八十八首〉／櫨紅葉夏　二」

「〈読了〉／櫨紅葉秋　三」

「〈読了／二百九十七首〉／櫨紅葉冬　四」

「〈読了／八十四首〉／櫨紅葉戀　五」

「櫨紅葉雑　六」。

朱書（ただし、やや濃い朱〔後掲図版でいへば「六百四十五首」〕と、明るい朱〔読了真道〕とがある。本文朱書もこの二種が混在する）・外題ともに真道筆と思はれる（後掲第一冊表紙図版参照）。

第一冊表紙見返しに「三田葆光集　黒川真道編」と墨書される。後人（真前？）の筆によるものか（後掲図版参照）。

墨付丁数、第一冊＝61丁・第二冊＝29丁・第三冊＝35丁・第四冊＝27丁・第五冊＝11丁・第六冊＝94丁。

歌数記載（表紙朱書・貼紙〔第三冊のみ〕による）、第一冊＝六四五・第二冊＝三八八・第三冊＝三五九・第四冊＝二九九・第五冊＝八四・第六冊＝未記載。

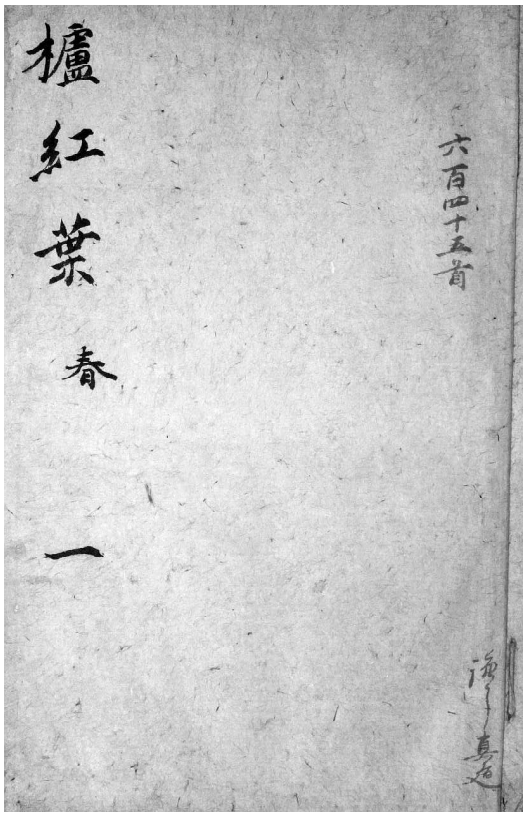
蔵書印「黒川真前蔵書」（各冊第一丁表右下、陽刻単郭朱印、宮内庁書陵部蔵『廻国雑記標註』〔黒・一九五〕に捺されるもの『圖書寮叢刊　書陵部蔵書印譜』下巻・一八九頁所掲〕と同じ。実践女子大学図書館・実践女子大学文芸資料研究所編『実践女子大学図書館所蔵黒川文庫目録【新版】』〔二〇一一・三〕

「黒川文庫印譜（抄）」にも所掲）。

なほ、黒川文庫全体の典籍の具体相、その流伝については、永田精一「黒川文庫」（『実践女子大学文学部紀要』二三〔一九八一・三〕→『実践女子大学図書館所蔵黒川文庫目録【新版】』）がその早い研究であり、近時、柴田光彦「黒川文庫の変遷について」（柴田編『日本書誌学大系86（2）黒川文庫目録　索引編』〔青裳堂文庫、二〇〇一・九〕所収）が出で、ここに至り黒川文庫全体を知ることが出来るやうになつた。その上で、本書をどのやうに位置付けるかは、問題として残される。『ノートルダム清心女子大学付属図書館所蔵特殊文庫目録』（一九七五）、及び、柴田前掲書によると、かつて、黒川家には七冊本の『櫨紅葉』が蔵されてをり、それは現在ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫に蔵されてゐることが分かるが（筆者未見）、七冊本であることから推してそれは刊本であることは疑ひない。従つて、黒川家側の記録に本書の名は見えないといふことになる。あるいは、近年まで、黒川家にとどめおかれたものかとも想像するが、確言は憚られる。

では、稿本から刊本へ、如何にその姿を変へたのか、具体的に見て行かう。節を改める。

《第一冊表紙》



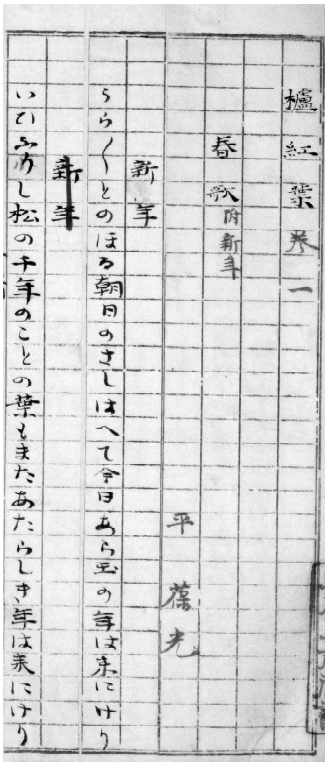
《第一冊表紙見返し題》

四、稿本から刊本へ

◇稿本と筆者

稿本のありやうをうかがふ一助として、春歌・冒頭部分の図版を掲出してみよう。

この形態に至る過程（朱筆・墨筆による訂正が施されるまで）を推測するに、



(1)（恐らくは歌題・歌会等ごとに）原稿用紙に墨で本文を書く。

(2)それを、一首単位（詞書等を含む）で切り取る。

(3)四季・恋・雑に略々部類しつつ、あらあら配列を整備して、一首づつ台紙に貼りつける（このことは、切り取られた一首単位の紙片の原稿用紙の色合ひが、まま微妙に異なることで、きりとつたものをそのまま並べたものではない、即ち、何らかの部類がなされたであらうことが推測されることを、徴証としうる）。

となら う。問題は、(1)(2)(3)を誰が行つたのか、といふことである。しかるべしさといふ点から考へれば、

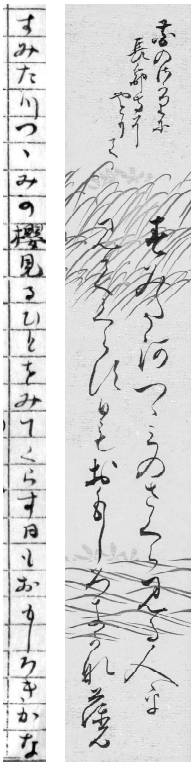
(1)→著者・三田葆光　または　三田佶

(2)→三田佶　または　黒川真道

(3)→同右　または　黒川真道

といふところであらうか。この内(1)に関しては、葆光・佶の自筆資料と本書を比較すれば、ことの決着は容易であらう。

幸ひ近時、葆光の自筆短冊二点を入手することが出来、内一首は本書に同一歌が見られるので、比較の材料が得られた。

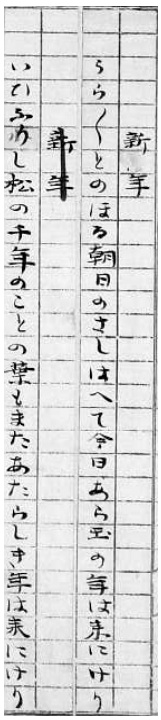


もとより感触以外のなにものでもないが、ひとまづこの両者は別筆と見ておくのが自然であると考へる。従つて(1)の所為を佶と考へておく。(2)(3)に関しては後文にて考へたい。

◇黒川真道の修訂

朱筆・墨筆による複数回かと推される真道の修訂行為は、いくつかに分類出来るのだが、必ずしもその順序は明確にしえない。そこで小論では、修訂行為を分類して示すことにとどめ、その順序を含めた相互の関係については、今後検討すべき課題として、触れないこととする（以下掲出は原則として春部より）。

Ⓐ重複する歌題の整除

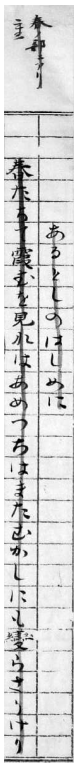


重複する詞書「新年」を一つに整理。このケースが真道による修訂の大半を占める。

Ⓑ字句の訂正・統一

「の元日」を「一月一日」に訂正。

Ⓒ重複歌の削除



後者図版に見える「春ノ部ニアリ」なる鼇頭朱書注記は、筆跡から見て、真道の手になるものと断じうる。従つて、その上から書かれてゐる朱の消し線も真道といふことになる。左傍の「重（重出ノ謂デアラウ）」の筆者は確言し難いが、ひとまづは、真道筆と見做しておく。

なほ数は少ないが、「重」及び消し線が墨筆でなされてゐる事例も存する。一例を掲出する。

Ⓓ表現の添削

「かすみを見れは」を「かすむを見れは」に訂してゐる。このやうに、添削と推される例はさほど多くはないし、字句の添削にとどめてゐる場合が大半なのではあるが、次例の如く、三句まるまる改訂してゐる場合もある。

「一夜あくる年のはしめのには鳥のこゑ」なる朴訥な表現を、「天の戸をおしあけかたのあかつきのとり」なる典雅な表現によく改めうるのは真道しかをらず、従つて、この筆跡は真道、かかる添削も真道といふことになる。この例から推して、本書全巻にわたる推敲も、真道その人になるものと、ひとまづは考へておきたい。

Ⓔ等類歌の削除

鼇頭朱書注記「春雪に類似」が指し示す詠歌は、恐らく、次の歌なのであらう。

上の句こそいささか趣を異にするとはいへ、下の句の完全なる一致は、「類似」と断じられても致し方あるまい。

そしてわれわれはここに、真道の周到なる目配りに思ひを致すべきである。機械的な部類・整除にとどまらぬ真道の気概を、ありありと感ずることが出来るのである。

◇貼紙の問題

稿本には多数の貼紙が存する。一例を図版で掲げよう。

ⓑに示した如く、原稿用紙上端一部を切り残し、それを広げれば、あたかも付箋の如き貼紙として機能するやうになつてゐるものである。

ⓐ

⇧第一冊（春歌）を上から見たところ

ⓑ

⇨付箋状切り残しを広げたところ

さて、前文では、

(1)（恐らくは歌稿単位で）原稿用紙に墨で本文を書く。
(2)それを、一首単位（詞書等を含む）で切り取る。
(3)四季・恋・雑に略々部類しつつ、配列を整備して、一首づつ貼りつける。

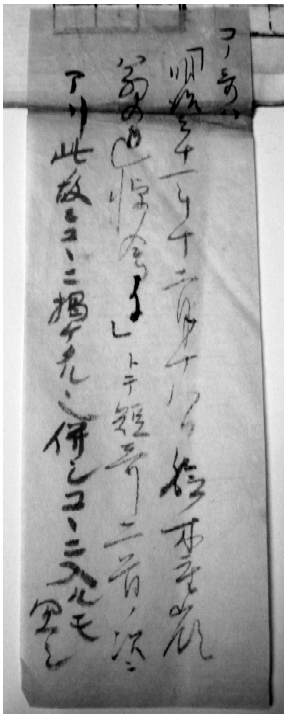
といつた前段階を想定し、(1)については、三田佶の所為であらうと推したが、(2)(3)に関しては、推定を留保しておいた。それは、この貼紙の問題をからめて考へられるべきだと判断したからであつた。

とはいふものの、この貼紙の〝機能〟について推定することはなかなかに難しい。何故ならば、その大多数が白紙のまま残され、ごくまれに存する真道の手によると思はれる書き込みも、貼紙自体が縒れてしまつてゐて、判読が出来兼ねる場合が多く、推定の根拠が得難いからである。

しかしながら、何らかの意味（小論の筆者は、部類における不審紙のやうな機能を想定してゐる）を持つものとして、この貼紙を機

能せしむべくことをよく成しうるのは、佶その人ではなく、佶から「かの集（＝琴後集）のさまにならひてむいかてこのあらましとけなむやうにうまくはからひ給ひてよ」と依頼された黒川真道と考へるのが、現時点では穏当であらうと思ふ。従つて、小論では、(2)(3)の所為を黒川真道と考へる立場をとることとしたい。

さらに、純然たる貼紙も、ごく数は少ないながら存する。その一例（巻六）。



図版では分かりにくいが、「コノ哥／「明治十一年十二月十八日……二首ノ次ニアリ」が墨筆、「此故ニ……入ルモ宜シ」が朱筆である。真道が部類に際して、最後まで揺れ動いてゐたことを如実に物語る証言として、貴重である。

◇稿本と版下との関係

最後にこの問題について、見通しを述べてみたい。ここで考へるべき要素は以下の通り。

(a)稿本は黒川家に残された。

→版下筆者・佐藤仁之助から戻されたとも考へうるが、蓋然性は低いと判断。

(b)稿本から直ちに版下本文が清書出来るかどうか。

→不可能ではなからうが、蓋然性は相当に低い。

この二点から推すに、稿本をもとに、真道が確定本文を作成し、それを佐藤仁之助に渡したと考へるのが、最も自然であらう。

なほ、いま述べた「確定本文」であるが、物的証拠があるわけではないものの、「確定本文」＝刊本本文であらうと考へる。さすがに、あらあらの調査による限り、ではあるが、刊本本文は、稿本における朱墨の訂正を厳格に反映してゐて、そこから逸脱した事例は見出し難いことを、付記しておく。

五、をはりに―家集の編纂と本文をめぐる臆断―

小論が、いささかなりとも実証的に論じうることがらは、前節までである。以下は、半ば感慨とでもいひつべき臆断に過ぎないことを、あらかじめ断つておく。

一つは、部類本家集の生成過程を、まざまざと確認することが出来たといふことである。いふまでもないことだが、かかる資料、極めてレアといふほどのものではない。例へば、橋本不美男が『原典をめざして』（笠間書院、一九七四・七）で示した、烏丸資慶の家集『秀葉集』を編むために、曾孫の光栄がものした草稿本・清書本（前掲書・一六八～一七一頁）の如きは、本書の正しき意味での（ある意味ではより生々しき）魁といふべきものである。

否、先例の有無云々よりも、小論の筆者にとつて何より興味深いことがある。それは、この両本（『櫨紅葉』『秀葉集』）が、いづれ

も他撰本部類家集であるといふことにつきる。

もとより古来より、自撰本部類家集は数多い。問題はその編纂時における心用ゐであらう。確たる外部徴証があるわけではないものの、己が家集を部類せんとする際には、相当の心配りがあつたらうことは、容易に想像がつく。これはある意味必然の所為。しかし、真道しかり、光栄しかり、縁深き者の家集とはいへ自らの家集でないものを部類する場合においても、作者自身と何ら変はるところのない細心の心用ゐを以てことがなされてゐるといふ事実は、少なくとも小論の筆者をして、他撰本家集に対する見方を一変せしめたといふを憚らぬ。

いま一つは、本文それ自体に対する研究者としての迫り方を、再思三考するを迫られたと痛感したことである。いまかりに、たとへば平安期、稿本『櫨紅葉』の如き典籍がただ一つ伝来してゐたと仮定してみよう。即ち、すべての伝本は、この一本から派生し関与しあひ、流伝して行くこととなる。そして、稿本『櫨紅葉』の如きものを直接書写した場合であつても（それは転写者に限らず、作者その人であつたとしてもさまでの逕庭はない）、出来上つた本文が同一であるとは限らない。むしろ、この時点で（相互の関係を論じにくい）さまざまな異本が発生することになつたらう、と想像する。朱墨さまざまに手入れがなされてゐる本文（ある場合には、貼紙にまで思慮を及ぼす必要がある）、そのいづれを採りいづれを捨てるか、それは、書写者の思念の埒内といふ他ないからである。

平安期の私家集の伝本は、概して複数系統に分かたれ、その関係も説明が難しい場合が多い。かかる場に、わが稿本『櫨紅葉』の如きものを置けば、現存する異本群を、あたかも糸がほぐされるかの如く立ち現れて行つたその結果として見ることは、ことの当否はさておき、許されるべきだと考へる。

仮定の上の仮定にすぎないが、以上の推定を〝真〟として、その上でここに、異本間における本文異同を据ゑてみよう。するとただちに、これら異本同士を対校・校勘することによつて、稿本『櫨紅葉』の如きものに遡及しうるか、といふ問題が立ち現れることとなる。小論の筆者の率直な見通しを述べれば、それは、文字通り絶望的であるといはざるをえない。しかし、いまだ、絶望的なのであつて、絶望ではない。

もしかりに、刊本『櫨紅葉』の如きもののみが残り、稿本『櫨紅葉』の如きものは佚亡して何人の目にも触れえなかつたと考へてみよう。もはやわれわれに、真道の真情あふるる編纂のこころに迫るすべは残されてゐず、刊本の如きものを転写した伝本をいくら対校・校勘したところで、どのみち、刊本に至りつくのが精々、現実にはそれとてもおよそ望めぬ場合が大半であらう。ここを以て初めて絶望と称しうるのである。

【備考】

小論は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）による共同研究「古典籍の書写と書写環境の相関性に関する総合的研究」（平成21～23年度、研究代表者＝武井）において、二〇一一年三月一八日（於・埼玉大学東京駅ステーションカレッジ）口頭発表した内容（「家集前史資料二点」）の一部を再構成したものである。当日の質疑応答の内容をすべて取り込めてゐないこと、ここにお詫びする次第である。